佛教大学　文学部論集　第95号（2011年３月）

ヘミングウェイの『エデンの園』を
フェミニズムの視点から読む（前）

野　間　正　二

〔抄　録〕

ヘミングウェイは、パパ・ヘミングウェイと呼ばれてきたように、米国における理想的な男性像のひとつの象徴とこれまで見なされてきた。ヘミングウェイ自身も、生前、そのマッチョな男性像を造りあげるのに努力を惜しまなかった。しかし死後出版された作品、たとえば『エデンの園』などが読まれるようになると、そうした男性的なヘミングウェイ像がゆらぎはじめた。その動きの急先鋒となったのは、いわゆるフェミニストとよばれる批評家たちであった。フェミニストたちは、ヘミングウェイの作品のなかに、作家ヘミングウェイの心のなかに隠されていた両性具有の願望や女性への変身願望を読みとっている。そこでここでは、わたしは、『エデンの園』をフェミニズムの視点から再読することで、そうしたフェミニストたちの主張を再検討した。

キーワード　ヘミングウェイ、フェミニズム、性差、人種、黒人女性

目次

(1) 荷風の「酔美人」における黒人の娘
(2) 黒人になろうとするキャサリン
(3) 作者の黒人女性観
(4) 女を超えようとするキャサリン
(5) キャサリンを見つめる作者の目
(6) 男でありつづけるデイヴィッド
(7) 作家像はゆらいでいるか？
(但し、今号では (1) から (3) を扱い、次号で (4) から (7) までを扱う。)

本文

この小説『エデンの園（*The Garden of Eden*）』を、ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）（1899-1961）は、1946年から書きはじめて、それ以降12年以上にわたって断続的に書き継いでいた。しかし、本人の力では完成させることができなかった。結局、死から25年後の1986年に出版された。遺されていた20万語以上あった原稿を、編集者のジェンクス（Tom Jenks）が３分の１ほどの約７万語にまでにカットしたものだった。

このジェンクスが編集して出版された『エデンの園』にたいしては、「（遺されている原稿を検討すれば、）ジェンクスは、ヘミングウェイ自身以外には、おそらく誰もできないほどうまくその仕事をやり遂げいている（Jenks probably performed his job as well as nearly anyone but Hemingway himself could have done）」（261）と主張する、フレミング（Robert E. Fleming）のような高い評価もある。しかし一方で、モデルモグ（Debra Moddelmog）のように、ジェンクス版の『エデンの園』は、「人気のある商品化されたヘミングウェイのイメージにそって（in accord with the popular, commodified Hemingway）」（59）編集されているから、「ジェンクス版はヘミングウェイが書いた本だとは主張できない本である（Jenks's version isn't the book we can claim Hemingway wrote）」（59）と主張する批評家もいる。

たしかに、ジェンクスが編集して出版された『エデンの園』は、ヘミングウェイの原稿から成ったものであっても、「ヘミングウェイが書いた本でない」のは事実である。また、３分の１にまで切りつめられたのに、ジェンクス版の「序」で説明しているように、ジェンクス版の編集が「ごく控え目な刈り込み（only a modest amount of pruning）」（vii）とは言えないのも事実である。ここで使われている「控え目な（modest）」という単語は、スウィフト（Jonathan Swift）（1667-1745）のパンフレット『控え目な（＝穏健なる）提案（*A Modest Proposal*）』（1729年）と同じような、皮肉がこめられているのかな、とさえ考えられるほど実態からかけ離れている。

しかし、ニューヨークのケネディ図書館（John F. Kennedy Presidential Library）が所有している『エデンの園』の原稿に、普通の人はアクセスできない。だから、普通の読者である私たちは、唯一出版されているジェンクス版の『エデンの園』を読まざるをえない。そこで、ジェンクス版の『エデンの園』にそった内容の要約をしておく。

小説の時代背景は1920年代。期間は、夏をはさんだ約半年間。場所は、おもにフランスのリビエラ地方とスペイン。主人公は、アメリカ人の新進作家デイヴィッド・ボーン（David Bourne）。デイヴィッドは、おもな語り手でもある。

金持ちの娘キャサリン・ヒル（Catherine Hill）とパリで結婚したデイヴィッドは、まず、新婚旅行でリビエラ地方の海岸の静かな漁村に滞在した。新婚旅行だから、二人は、食べて酒を飲んでセックスして泳いで寝るの繰りかえしの日々を送っていた。「しあわせでけだるい

（happy and lazy)」（11）３週間ほどがすぎた。

そのしあわせな単調な繰りかえしのなかで、先に変化を求めたのは、妻のキャサリンだった。キャサリンは、まず、髪を短く刈って、男の子のようになる。つぎに、セックスの場でも、デイヴィッドに男と女の役割の交換を求める。さらに、日焼けして、真っ黒になろうとする。

そんなハネムーン生活のなかで、デイヴィッドは、新作が売れているという通知をうける。そのこともあって、デイヴィッドは、つぎの本はもっと良くしたいと願って、仕事を毎日しはじめる。ひとりの時間が増えたキャサリンは、偶然出会った美しい娘のマリータ（Marita）を愛人にして、同じ宿屋に住まわせる。二人はレズビアン関係になったことを、デイヴィッドに隠さない。それればかりか、キャサリンは、デイヴィッドにマリータを愛人にすることすら勧める。やがて、デイヴィッドもマリータを愛するようになる。こうして、キャサリンとマリータとデイヴィッドとの三人のややこしい関係が生まれる。

そのややこしい関係のなかで、キャサリンは常軌を逸(い)しはじめ、狂気に近づいてゆく。たとえば、デイヴィッドが書きためていた、アフリカの物語の原稿を焼却してしまう。そして自分たちの幸せだったころの新婚生活を書くように、デイヴィッドに強要する。そんななかで、デイヴィッドはマリータをますます真剣に愛するようなる。マリータもデイヴィッドだけを愛するようになる。その結果、キャサリンは、デイヴィッドとマリータの二人のもとを去ってゆく。ここで、この小説は終わる。

(1)荷風の「酔美人」における黒人の娘

この『エデンの園』を読むとき、比較すればおもしろい作品が日本にもある。それは、荷風の短編「酔美人」である。「酔美人」は、『あめりか物語』（1908年）のなかに収められた短編のひとつである。

短編集の『あめりか物語』は、米国に滞在している日本人による、米国での見聞記という体裁になっている。作品中の語り手の日本人は、作者の永井荷風と重なるところが多い。だからこの作品は、荷風の米国での見聞記と見なされがちである。だが、もちろん、荷風による創作が加えられているのを忘れてはいけない。

短編「酔美人」では、日本人の「私」が、米国人の画家から聞いた話がおもに語られている。その話とは、つぎのようなものだ。

米国人の画家のかつての知り合いに、マンテローという男がいた。フランスからやってきたマンテローは、「(米国へ）来た当座は、こんな殺風景な野蛮な国にはとてもいられたものではない」（70）と考えていた。しかし、「大分黒人の血が混じっている一人の女」（71）に出会って、夢中になり、ついには衰弱するまでその黒人女を毎日愛しつづけた。衰弱した身体を回復するために、イタリアにまで保養に行ったが、その甲斐もなく死んでしまった。最後に、その米国人の画家は、日本人の「私」にむかって、「マンテロー君は軍人が戦争で死ぬのと同じく、

己の好む道に倒れたのですから、私は彼を悲しむと共に賞賛しますよ」(77) と語って、その話を終える。これが、短編「酔美人」の要約である。

ここで描かれている混血の黒人女性と、ヘミングウェイの『エデンの園』のキャサリンとを比較検討すると、興味ぶかいことがあきらかになる。そこで、もう少しくわしく、荷風の短編が描く黒人の娘について考えてみよう。

ボードビル・ショー（荷風は「寄席」と訳している）で、ダンサーとして働くその娘は、「短く切った頭髪」(71) で、「如何にも豊（ゆたか）」(71) な肉づきをしていた。踊りの合間に、客席の方を、「大きな黒い眼」(72) で情感いっぱいに眺めまわす。その黒い目を見たマンテローは、「あの眼付きはどうも我々文明の人間の眼付きではない。動物の眼付きだ。馴れた家畜が主人に食物を請求（ねだ）る時の眼付きである」(72) と感じる。そこで、そのショーに３日間つづけてかよった。３日目には、「互に最初の握手をしてから、一時間とは経ぬ中に、もう馴れ馴れしく腕を組んで、一所に女の宿（とま）っている家へと遊びに行った」(72) のだ。そして「（彼女が）身体中の神経が感じ得られる愉快は、余すところなく、睫毛の細かい戦（そよ）ぎから微妙な指の先に至るまで、出来得られる限り強い愉快を感じようと企だてている」(72) のを感じとった。しかも彼女は、「女の身体の熱い事、まるで燃える火のようです」(75) という身体をしていた。その手で握りしめられれば、１分もしないうちに、「胸は忽ち息苦しいほど喘（はず）んで来るばかりか、己れの身体中の熱度まで、次第次第に女の方へ吸い取られてしまうような心地がするのです」(75) という女性だったと語られている。

マンテローは、それから「三月ばかりの間は、一晩とても欠かした事なく」(74)、彼女の部屋を訪れた。しかし、ふとした浮気心から、「（当分の間）遊びには来られない」と言い置いて、彼女の部屋を出た。しかしそのとき彼女は、落ちついて「はい、そうですか」(75) と答えたのみだった。翌日、気がついたら、マンテローは彼女の部屋の前に来ていた。マンテローを出迎えた彼女は、彼がやって来るのがわかっていたかのようだった。

マンテローは、「彼女から遠（とおざ）かりたいと絶えず悶えていながら、依然としてその傍へと引寄せられて」(77) いた。やがて、しだいにやせ衰えて目ばかり光らせていた。「一年ばかり」(77) がすぎると、マンテローは身体を壊してしまい、厳寒の米国におれなくなった。それでイタリアに保養に行ったが、その地で亡くなってしまった。

マンテローの物語を語った画家は、語りの最後で、その経緯をつぎのように要約している。マンテローは最初は「自分は男である、主人である」(76) という自信をもって、彼女を「馴れた従順な家畜」(76) として愛し戯れていた。だが、いつの間にやら、彼女の身体の「怪しい見えざる力」(76) にからめ取られて、そこから抜けだすことができなくなった。なぜなら、「（黒人の娘は）人間よりは動物の血を沢山に持っている」(76) からだったと。

この「酔美人」の全体の語り手は、先にも指摘したように、荷風とも考えられるような日本人である。そして「酔美人」の重要な部分は、その日本人の語り手が、米国人の画家から聞い

たマンテローにかんする話である。だから、先に要約した黒人女性の姿は、小説の体裁からいえば、マンテローを知っていた米国人の画家の視点から描かれている。形式的には、フランスと米国の白人の男性の黒人女性観を反映している。

たしかに、形式的には、そう言える。しかし「酔美人」を書いたのは、荷風である。だから、フランス人マンテローだけでなく、マンテローの話をした米国人の画家そのものも、荷風が創造した人物である可能性がある。少なくとも、その画家の黒人女性にたいする考え方には、日本人の荷風の黒人観が混入していることはじゅうぶんにありえる。しかし、黒人のいなかった日本で育った荷風は、おそらく彼の黒人観も、米国に来て初めて身につけたものと思われる。そして荷風が黒人女性と親しくつき合っていたという証拠もない。とすれば荷風は、米国やフランス滞在中に、その画家のような人物に実際に出会ったのか、あるいは、その画家と同じような見解をもつ人物に何度か出会ったのではないかと考えられる。そうした可能性は高い。なぜなら『あめりか物語』のなかの「林間」という別の短編には、黒人娘にたいする同じような考えを語る若い白人兵士の姿が描かれているからである。だから「酔美人」のなかで、画家によって語られる黒人娘のイメージは、とうじの米国における多くの白人男性がもっていた黒人女性のイメージをあらわしていると考えてもよさそうだ。

短編「酔美人」の舞台背景は、1904年のセント・ルイス。また、荷風が米国に滞在していたのは、1903年から1907年までである。そして本の出版は1908年である。つまり、20世紀初頭の米国の多くの白人の男は、黒人の娘にたいして、上で指摘したような、偏見と妄想をもっていた。少なくとも荷風はそう考えている。

米国の白人の男たちがもっていた偏見と妄想を、もう一度まとめるとつぎのようになる。黒人の娘は、人間よりは動物に近いから、不思議な魔力／魅力をもっている。また、セックスが好きで、すぐに身をまかせて、性の快楽を心底から全身で味わいつくそうとする。その魔力に満ちた身体を、男がいったん知ると、衰弱して死ぬまでセックスを繰りかえすことになる。

これは、黒人の娘にたいする、白人男性の勝手な妄想である。それは明白である。ところで、この偏見と妄想は、ヘミングウェイが『エデンの園』を書いていた1940年代から1950年代には、どう変化したのか、あるいは変化しなかったのか。また、そうした黒人女への偏見と妄想を考慮すれば、『エデンの園』は、どのような作品として読めるのか。それらのことを、『エデンの園』を読むことで検討してみよう。

(2)黒人になろうとするキャサリン

『エデンの園』のなかで、キャサリンは、「インド人の血が混じっていたらいいのに（I wish I had some Indian blood.）」(31) と願っている。この場合、英単語の Indian は、意味的には、「インド人」と、「アメリカの先住民＝インディアン」との両方を意味している。ところが、語源的に考えても、白人であるキャサリンにとっては、インド人とインディアンとは、とくに

区別すべきものではなかった。肌の色の濃い同じような人種だった。

英語では19世紀になっても、インド人も、ニグロ（黒、黒人）と呼ばれることがあった。たとえば、1899年に出版されたバナーマン（Helen Bannerman）の有名な童話『ちびくろさんぼ（*The Story of Little Black Sambo*）』の主人公の少年は、南インド人の少年である。その少年にたいして、「黒い（black）」という形容詞が使われている。それだけでなく、1899年に出版された原版のさし絵でも、サンボは黒い肌のアフリカ風の少年として描かれている。これらのことを考慮すれば、上の引用文からは、キャサリンが、黒人のような黒い皮膚に憧れているのがあきらかになっている。

黒い肌に憧れているキャサリンは、その「見事な身体（her beautiful body)」（12）を、むらなく焼くために、わざわざ人気のない海岸まで出かけて、全裸になって日光浴をする。黒人のように全身を真っ黒にするために、そこまでの努力をしている。しかも、その努力は、「今（＝日焼けして黒くなっている状態）も好きだけど、もっと黒くなりたい（I like it. But I want to be darker.)」（22）と、際限がない。全身が黒い黒人にできるだけ近づくために、飽くなき努力しているのだ。

「どのくらい黒くなりたいのか（How dark are you going to get?)」と、デイヴィッドに聞かれて、キャサリンは、「できるだけ黒く（As dark as I can.)」（31）と答えている。この「できるだけ」という答え方は、キャサリンにとっては、黒くなるのは、数量的な濃さではなく、心理的なものであることを暗示している。黒人に近づきたいという心理的なものなのである。

黒人に近づきたいという願望は、キャサリンの別のふるまいにも見いだせる。キャサリンは、髪の毛を「男の子のように短い（as short as a boy's)」（14）断髪にしただけでは満足できなくなり、その後に、さらに短く刈って「なめらかで短く刈られた（smooth and close clipped)」（45）髪にしている。これは、まず、男に変身したいという願望の表現である。しかしそれだけではない。荷風も描いていた（71）ような、黒人の特徴と見なされていた短い髪の毛をまねるためでもある。

なぜそう考えるのかといえば、キャサリン自身が、自分の短く刈りこんだ髪の毛を「でも、獣（けもの）めいた感じがするわ（But it feels like an animal.)」（47）と語っているからだ。さらに、デイヴィッドまでも、そんな短髪のキャサリンを見て、「小動物のよう（as a small animal)」（47）だと感じているからだ。キャサリンもデイヴィッドもともに、短く刈りこんだ髪に、「動物」の属性を感じとっている。

短く刈りこんだ頭髪に「動物」を感じる二人の意識と、黒人を「人間よりは動物の血を沢山持っている」と感じていた荷風の作中人物の意識とは、その意識の底ではつながっている。キャサリンもデイヴィッドも、黒人は、白人よりも動物により近いと思っているからだ。アフリカの黒人の特徴は、その動物性にあると考えているのである。たとえば、キャサリン自身が、

アフリカの特徴は「土埃とハエと残酷さと野獣性（the dirt and the flies and the cruelty and the bestiality）」（223）にあるのだと、明快なことばで語っている。「野獣性」こそがアフリカの特徴であり、アフリカの黒人の特徴だと語っているのだ。以上から、つぎのように言える。髪を極端に短く刈ることで、キャサリンは動物的な黒人の娘に近づこうとしていると。

では、キャサリンは、なぜ動物的な黒人の娘に近づきたいのだろうか。そのことを考えてみよう。キャサリンはセックスの直後、唐突に、デイヴィッドにむかって「あなたを愛しているわ、もし二人でアフリカに行くことがあれば、あなたのアフリカ人の女になるわ（I love you and when we go to Africa I'll be your African girl.）」（29）と言っている。

ここで、キャサリンが「アフリカ人の女（African girl）」という表現をしていることに注意する必要がある。この場面での girl という表現には、微妙な意味がふくまれているからだ。とりあえずは、girl を「女」と訳したが、girl にはもちろん「若い女・娘」の意味もあり、「愛人」の意味まである。キャサリンは、デイヴィッドと正式に結婚している妻である。だから、「かわいいアフリカ人の妻（lovely African wife）になるわ」とでも言えば、あまりセックスのことが意識されなかったはずだ。しかしキャサリンが、あいまいな意味をもつ単語 girl を使ったことで、読者は「愛人」という意味を読みとることができる。すると、セックス直後のベット上での発言でもあるから、言外にセックスを意識してしまう。

だから、上の引用文からは、キャサリンにとって、とりわけセックス直後のキャサリンには、愛（＝セックス）することと、黒人の女になりたいことは、意識の底で結びついているのが、読者にはわかる。また、言うまでもなく、キャサリンが意識の底では黒人になりたい、つまり黒人の女としてセックスしたいと思っていることもあきらかになっている。それだけでなく、黒人の女は、動物的だから、白人の女よりセックスが魅力的であるはずだという劣等感が間接的にあきらかになっている。

その分析が間違っていないことは、つぎのキャサリンのことばからもわかる。キャサリンは、「身体中を黒くしたい（I want every part of me dark.）」（30）理由として、「わたしがだんだん真っ黒になってゆけば、あなたは興奮しないかしら（Doesn't it make you excited to have me getting so dark?）」（30）と言っているからだ。黒い肌は、夫のデイヴィッドを興奮させるはずだから、肌を黒く焼きたいのだと語っている。また別の場面では、キャサリンは、その黒い肌の色は「ベットでとても似合うのよ（It's very becoming in bed.）」（64）とも言っている。以上のキャサリンのことばをわかりやすく言いかえれば、黒人のような黒い肌は、デイヴィッドを性的に興奮させて、二人のセックスを豊かなものにするはずだから、肌を黒くしたいと、キャサリンは語っていると要約できる。トニ・モリスン（Toni Morrison）の簡潔な表現を使うなら、「（黒くなった肌は）さらなる性的な興奮を生みだす（produces further sexual excitement）」（87）のである。

さらに、ジェンクス版の『エデンの園』では削除されたが、遺（のこ）されていた原稿には、

「ソマリ人の女たちは、自分から逃げられないように男を捕まえておく方法を知っているって、ほうとうなの？（“Is it true that Somali women have ways of holding a man so he can never leave them?”）」（Moddelmog 66）という、キャサリンからデイヴィッドへの質問があるそうだ。ソマリ人は、アフリカ東部にいる黒人である。白人の男（デイヴィッド）だけでなく、白人の女（キャサリン）にも、黒人の女はセックスにおいてすごい能力をもっているという幻想が共有されていたことが、ここでは具体的なことばであらわされている。ここで描かれているソマリ人（黒人）の女は、荷風が「酔美人」で描いた、マンテローを性的な魔力でとり殺してしまった黒人ダンサーと同じイメージをもっている。

しかしキャサリンには、注意すべき特徴がある。それは、キャサリンの黒人への変身願望が、実は、中途半端である点に見いだせる。キャサリンは、黒い肌の黒人に変わることで、自分のセックスの魅力を増そうとしている。それは確かだ。しかし一方で、キャサリンは、自分の短いブロンドの髪の毛を、さらに「銀色に輝く北欧のブロンド（a silvery northern shining fairness）」（81）に染める。

ブロンドであることは、白人であることの証明である。そしてキャサリンは、もともとブロンドの髪の毛をしている。それにもかかわらず、キャサリンは、地毛であるブロンドの髪の毛を、とくに典型的な白人だと考えられている北欧人（Nordic）のブロンド（＝銀色の薄い色目のブロンド）にさらに変えようとしている。黒人になろうとしながら、一方では、今よりもさらに純粋な白人になろうとしているのだ。この点において、キャサリンの黒人への変身願望は中途半端なのである。

キャサリンの内部には、純粋な白人になりたいという抑えがたい衝動があった。その衝動は、キャサリンが「銀色の北欧のブロンド」に染めるだけでは満足できないことにあらわれている。キャサリンは、「銀色の北欧のブロンド」に変えた髪の毛を、さらに漂白する。最後には、キャサリンの髪の色は「とても淡いほとんど無色の銀色（a very light almost toneless silver）」（143）にまでなっている。また、デイヴィッドは、キャサリンからキャサリンの髪の色と同じ色に染めるのを求められたが、デイヴィッドの染められたその髪の色は、語り手によって、「ほとんど銀色がかった白（almost silvery whiteness）」（168）だったと語られている。

キャサリンの純粋な白人になりたいという願望は、だんだんとエスカレートしていった。そのエスカレートしてゆく様子が、元来の「ブロンド（blond）」（30）の髪の色が、「北欧のブロンド（northern fairness）」に変わり、そして「無色の銀色（toneless silver）」や「銀色がかった白（silvery whiteness）」へと変化したと、語られることでたくみにあらわされている。

要約すると、キャサリンは、セックスの能力や魅力を高めるために、黒人の女になりたいと願っている。しかし一方で、自分の白人性を純化することで白人としてのアイデンティティを強調したいとも望んでいる。キャサリンは、相対立する分裂した欲望を、自己の内部にもっている。この相反する欲望の存在が、キャサリンを最終的に狂気に駆りたてる原因のひとつにな

ったと思われる。

(3)作者の黒人女性観

前段の(2)の「黒人になろうとするキャサリン」で証明したように、白人のデイヴィッドもキャサリンも、荷風の作品で描かれていた画家と同じように、黒人の女は、セックスにおいて特別の能力をもっているという、幻想と偏見をもっていることがわかった。生まれつき白い肌のキャサリンは、肌を黒く焼くことで、黒人の女にすこしでも近づいて、自分のセックスの魅力を高めようとしていることもわかった。

もちろん、ポストコロニアルの視点を持ちだすまでもなく、冷静になって考えれば、キャサリンのそのふるまいは、人種的な偏見にもとづいた、幻想にすぎない。おろかしいものだ。しかし作者ヘミングウェイは、荷風もそれを利用したように、黒人の娘はセックスにおける特殊な魔力／魅力をもつという、とうじの白人社会で共有されていた幻想を利用して、キャサリンのふるまいを読者に納得させている。

そのことは、作品のつぎのような展開からも証明できる。デイヴィッドは、作品の展開とともに、結婚したばかりのキャサリンを捨てて、マリータを愛するようになる。そしてキャサリンは、デイヴィッドとマリータと残してパリに旅立つ。一方、愛しあっているデイヴィッドとマリータとは、一緒に暮らしつづけるだろうということを暗示して、この作品は終わる。

この展開が示しているのは、デイヴィッドにとって、マリータは、結果的に、キャサリンよりも魅力のある女となったということだ。そこで、マリータの女として魅力を、作者ヘミングウェイは、どうように描いているのかを検討してみよう。

ヘミングウェイは、まず、マリータをデイヴィッドの作品の讃美者として描いている。作家であるデイヴィッドにとって、自分の作品を高く評価してくれる女性は、それだけでも魅力的な女性として映るのは確かだろう。それ以外にも、作家のヘミングウェイは、語り手のデイヴィッドに、マリータの生来の肌の色や髪や目の色に、強い関心を向けさせている。言うまでもなく、女性の肌の色や髪や目の色は、女性の魅力の大きな部分を占めている。つまりヘミングウェイは、マリータの女としての魅力を、マリータの肌や髪や目の色に注目することで、読者に伝えようとしている。そのことを、キャサリンとの比較で考えてみよう。

キャサリンが、「私がこんなに黒くなると思ってた？（Did you think I could ever be this dark?)」と尋ねたとき、デイヴィッドは「いいや、君はブロンドなんだから（No, because you’re blond.)」(30) と答えている。デイヴィッドは、キャサリンはブロンド（blond）だから、そんなに肌が黒くなるとは思っていなかったと答えている。

このように、英語のblondという単語は、たんに「金髪」を指すだけでなく、「皮膚の色が白い」の意味もある。だからキャサリンは、その名前（キャサリン・ヒル）だけでなく、背も高くて (98)、金髪で色白であることからも、色白で碧眼金髪で背の高い、いわゆる北方系の白

人のカテゴリーに入る女性であるのが想像できる。実際、キャサリン自身も、自分のことを「色白の女（the very fair one)」（103）と呼んでいる。

キャサリンは、色白の女だから、意識的に黒くなろうとしている。ところが一方、マリータは、キャサリンによって、「ダークな娘（a dark girl)」（103）と呼ばれている。また、デイヴィッドも、マリータのことを「ダークな美しい人（the dark handsome one)」（95）とか、「美しいダークな娘（the pretty dark girl)」（124）とかと呼んでいる。

英語の dark は、人にたいして使われた場合、「髪や目の色が黒い」や「皮膚の色が浅黒い」ことをあらわす。ダークは、ブロンドとは対照的な意味合いをもっているのだ。だから「ダーク」なマリータは、とうぜん目の色も、黒人と同じように、黒い目をしていたと思われる。

もちろん、マリータは白人である。しかし、「黒っぽい（＝ダークな）髪（her dark hair)」（205）をして、「みずみずしい褐色の身体（her fresh brown body)」（246）のマリータは、南欧系の白人として描かれている。北方系のキャサリンとは対照的な白人女性として描かれている。黒人の批評家・作家のトニ・モリスンも、マリータを「ダークな看護婦（a dark nurse)」（88）と呼び換えている。

また、キャサリンは、マリータのことを、「油田の地権もちの酔っ払ったインディアン（a drunken oil-lease Indian)」（111）と呼んでいる。インディアン（Indian）は、すでに指摘したように、インド人を連想させ、インド人は19世紀にはニグロ（黒・黒人）とも呼ばれていた。黒人のような黒い肌になろうと願っているキャサリンは、マリータの「黒っぽい（dark）肌」が気になるのだ。うらやましいから、あえてインディアン（＝インド人）と、おとしめた言い方でマリータを呼んでいる。

さらに、デイヴィッドは、マリータのことを、「彼女の肌の色と皮膚の信じられないほどのきめの細やかさは、ほとんどジャワ人だった（her coloring and the unbelievable smoothness of her skin were almost Javanese)」（236）と語っている。赤道に近いインドネシアに住むジャワ人は、肌の色の黒い人種だ。とうじの西洋の白人には、ジャワ人は、イメージ的には、黒人に近い人種だったと思われる。

また、キャサリンとデイヴィッドとは、「ピレネー山脈からアフリカは始まるといつも言われている（They always say that Africa begins at the Pyrenees.)」（52）という言い方について、話し合った。そのときの二人は、大筋では、その言い方に同意している。ピレネー山脈は、フランスとスペインとの国境の山脈だ。だから二人は、スペインをふくむ南欧はアフリカに近いことを再確認していることになる。南欧がアフリカに近いことが、作品中で強調されているのである。

また一方で、デイヴィッドは、マリータを「小動物のようだ（like a small animal)」（236）と見なしている。また、海岸にいる全裸のマリータを見て、「アザラシのようだ（You look like a seal.)」（242）とも言う。動物の比喩を使って、マリータをあらわしている。マ

リータの場合は、キャサリンのように極端に短髪にしなくても、つまり意識的に変身しなくても、そのままの姿で、動物との近さが感じられるのだ。この動物との生来の近さも、マリータと黒人とが近い存在であることを示している。

以上から、作家のヘミングウェイは、黒い目で、黒っぽい髪をして色黒のマリータを、南欧人の特徴をそなえている女として描いている。それだけではなく、その生まれつきの性質そのものにおいて、黒人女に近い属性をもつ女として描いている。そして黒人の「黒さ」には、トニ・モリスンのことばを使えば、「黒さと欲望、黒さと非理性、黒さと危険な背徳との間には、つねに連想が働く（the associations constantly made between darkness and desire, darkness and irrationality, darkness and the thrill of evil）」（87）のだ。黒人女の黒い肌は、セックスにおける官能性をさらに高めるのである。

一方で、デイヴィッドは、女性との関係において、セックスをとても重要視している男として描かれている。いわばハネムーンの期間中だから、それも当然だとはいえる。しかしそれだけが、理由ではない。実は、デイヴィッドは、女性との関係において、セックスをとくに重要視する本来的な性質をもった男として描かれている。たとえば、デイヴィッドは、キャサリンの外見やふるまいには、注意を払っていて敏感に反応する。しかし、キャサリンの心のなかをいろいろと推しはかろうとすることはない。彼女が心に悩みを抱えているのが読者にすら推測できるのに、そのことをデイヴィッドは忖度（そんたく）することはない。また、マリータにたいしても、身体の特徴はいろいろ観察するが、彼女の心の動きに関心を向けることはあまりない。デイヴィッドは、セックスの対象としてしか、女性と対応できない男なのだと、フェミニストに非難されても仕方のないような男として描かれているのだ。

そんなデイヴィッドが、生まれつき黒人に近い存在であるマリータを、最終的には選んでいる。生まれつきブロンドな女、つまり金髪で色白なキャサリンを捨てさり、自然のままでダークな女、つまり黒い目で、黒っぽい髪で色黒のマリータを、デイヴィッドは選んでいる。

こうしたことを考えあわせるならば、デイヴィッドがマリータを選んだ理由のひとつに、マリータが黒人女がもつような性的の魔力／魅力を、生まれつき強くもっていたことにあったと見なせるだろう。言いかえれば、作者のヘミングウェイも、20世紀の初頭に荷風が利用した黒人女にたいする偏見と幻想を、そのおよそ40年後になっても利用しているといえる。

〔注〕　『エデンの園』の日本語訳としては、ヘミングウェイ著『エデンの園』沼澤洽治訳（集英社文庫　1990年）が出版されている。しかしここでは、沼澤訳も参考にさせていただいたが、『エデンの園』からの引用文の日本語訳は、論旨との関係上すべて拙訳である。したがって引用箇所のページ数は、原典Ernest Hemingway, *The Garden of Eden*（New York: Scribner, 1987）によって、丸カッコ内に示している。

〔引用文献〕

永井荷風『あめりか物語』（岩波文庫　2002年）

ヘミングウェイ、アーネスト『エデンの園』沼澤洽治訳（集英社文庫　1990年）
Fleming, Robert E. "The Endings of Hemingway's *Garden of Eden*." *American Literature* 61, no 2 (May 1989): 261-70.
Hemingway, Ernest. *The Garden of Eden*. New York: Scribner, 2003.
Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Ithaca: Cornell UP, 1999.
Morrison, Toni. *Playing in the Dark*. New York: Vintage, 1993.

（以下次号）

（のま　しょうじ　英米学科）

2010年10月６日受理